

第三章 各園における実践事例

本章に掲載している実践事例は、下記の様式に沿って各園の実践をまとめていただいたものです。

1 実践事例について

実践事例の見方

() 歳児 実践事例 () 活動名 () 月
 視点 () 視点 (~) (~)

【遊びの経過】
 ※この活動の視点に即した子どもの様子を書いています。

【ねらい】
 ※視点に沿ったねらいを書いています。
 心情・意欲・態度面の育成をねらい、「～できる。～知る。」というような技能や理解の向上を図るものではありません。

【評価】 ← 保育を評価するポイント、評価の観点を記入しています。
 ※どんな行動や言葉が見られれば、ねらいを達成していると言えるのか、具体的な子どもの姿を書きます。

【○幼児の活動 ★環境の構成 ■保育者の援助】

★

子どもの言葉・思い
【見取りの視点・キーワード】
 子どもの具体的な姿・育ちつつある心情・意欲・態度を書きます。

どうやったら○○ちゃんみたいにできるのかな。
 【疑問】【探究心】

写真

■保育者の援助
 ★環境の構成
 ※ねらいにせまるための援助や構成を焦点化して書きます。

【吹き出し】には、
 ①実際に子どもが発した言葉
 ②子どもの表情や姿などから、保育者がねらいにつながると考える子どもの思いや言葉を記入しています。
 *それぞれ、文字の色を分けたり、吹き出しの形を変えたりすることもできます。

【考察】 ← 保育の内容等の振り返り、及びこれに基づく改善点を記入しています。
 ※【ねらい】【評価】に対する子どもたちの様子、それを受けてどう環境の再構成や援助を行うのか、次回の活動へ発展させる際の留意点等を記入します。

第三章 各園における実践事例

- 1つの遊び・活動を通して、子どもたちは頭と心と体を働かせながら、様々な資質・能力を身に付けていきます。また、子どもたちの諸能力は、それぞれ単独で発達するのではなく、相互に関連し合いながら総合的に発達していくものです。保育者は、遊びを通して子どもが発達していく様々な姿を総合的にとらえるとともに、そのために必要な経験が得られるような状況を作ることを大切にしなければなりません。

このように考えると、活動のねらいを1つに絞って実践事例を作成していることは矛盾しているように感じられるかもしれません。もちろん、その活動から期待できるたくさんの子どもの姿を予想し、一人一人の子どもについて見取り、評価していくことは大切です。しかし実際には、ねらいが曖昧なままで子どもまかせの活動に陥ってしまい、どのような力が育ったのか見取るのが難しいという現状もあります。



- そこで、「視点」を絞って実践事例を書くことをすすめています。そのことが、ねらいに基づき、「子どもの姿」や「保育者の援助」、「環境の構成」等について振り返ることになり、保育者がねらいを達成するために何をしたのか、どうすべきだったのか、今後どのようにしていくのかなどについて考察し、実践することになるからです。そのことにより、結果的に様々な子どもの育ちや学びを見取る力を保育者がつけることにつながると考えています。



実際に、実践事例を作成している多くの園から、「主なねらいを絞って子どもの姿を見取ることを意識して保育を行っていたら、子どものいろいろな姿がよく見えるようになった。」「子どもの多様な姿に合わせ、指導や援助も適切で具体的なものになってきた。」という声をいただいています。

- 実践事例を作成することによって、意図的に行っていた援助・環境構成についての振り返りや子どもの見取り等がより確かなものとなります。また、意識しないで行った援助等についても考えることになり、それまでは気付かなかった子どもの姿や自分の指導の課題などを多角的に反省・評価していくことにつながると考えています。

保育者が総合的な指導をする力を発揮するためには、子ども一人一人の発達段階と個別の状況に応じて計画的・具体的に保育を構想し、実践する力が求められます。

本章で掲載している実践事例を参考に、自園の記録や指導のあり方を考え、子どもの実態や地域の特色などを考慮した自園ならではの実践を展開していきましょう。